復興に向けて。つながる地域のチカラ。

今回の豪雨災害では、過去に例を見ないほど多くの浸水被害が出ましたが、日に日に復旧へと近づいているように感じます。
その背景には消防団や若手ボランティアをはじめとする地域のチカラがありました。その中でも一部ですが、それぞれの思いを胸に復旧活動を行う人々をご紹介します。

消防団活動風景

消防団

武雄市消防団　第9分団長
東島 芳文（ひがしま よしふみ）

消防団員歴27年のベテラン。今回の災害では団員を指揮する立場で災害対応に従事。

団員全員に共通していたのは「地域の皆さんを助けたい」という強い思い。

災害による被害が大きかった北方町を担当する第9分団。災害発生当時は、自身の家屋の被災を受けた団員も少なくなかったそうですが、分団長東島さんの呼びかけで団員の8割が即座に駆け付けました。今回の災害による復旧スピードの速さを支えるのは、地元の消防団だからこその土地勘と団結力があったのではないかと考えられます。
第9分団長の東島さんは、「平成2年の時は今回ほどのスピード感を持った対応は出来なかった印象があります。団員が度重なる災害に学び、訓練を強化してきたことが役立ちました」と語ります。とはいえ、土地勘ある消防団で、ボートを使用した人命救助の訓練を行っていても実際の現場での救助は困難だったとのこと。というのも実際は水の流れも速く、下に何があるのかもわからない泥水の中を進まなければならない状況は想像以上の過酷さでした。
「それでも地域の皆さんを助けたい、という思いで団員たちの心は一致していたと思う」と振り返る東島さん。
自らの危険や休息の時間を顧みずに、災害支援に尽力した団員たちの活動は人命救助、物資輸送、ゴミ処理など多岐にわたり、消防団なくして復旧活動は進まなかったでしょう。

学生ボランティア

前列（左から）**森山幸樹**（もりやまこうき）
岩永翔斗（いわながしょうと）
後列（左から）**新谷唯**（しんたにゆい）
小柳鈴華（こやなぎすずか）
田中愛深（たなかあみ）
松尾美琴（まつおみこと）

災害ボランティアを通して芽生えた、もっと支援に関わりたいという思い。

親戚や友人が被災したという報告を受け、すぐにボランティアに参加する決意をしたという武雄高校生の学生ボランティアの皆さん。特に学校側からの呼びかけがあったわけではなく、自らの意思で参加を決め、結果学校の大半の生徒がボランティアに集結しました。
どの生徒に聞いても一言目に出てきたのは「テレビの中の出来事と思っていた大災害が、まさか自分の身に起こるなんて」という驚きの言葉。それと同時に「何か自分たちに出来ることはないか」という思いが沸き起こったと言います。
彼らがボランティアに参加した日は最も災害の爪痕が残る週末でした。至る所に入り込んだ水により異臭を放つ泥のかき出しや無残にごみと化した家財道具の運搬など。作業は過酷でしたが何より自分たちとの交流で被災者の方が笑顔を見せてくれた瞬間、大きな喜びを感じたと言います。
彼らの活動は復旧を支えただけでなく彼ら自身にも大きな影響を与え、今後他の場所で災害が起こった時でも真っ先に支援に駆け付けたいという思いを芽生えさせました。

武雄高校生ボランティア作業風景

復旧を支える各種団体

消防団や学生ボランティアのほかにも各方面から今回の災害について支援をいただきました。全てではありませんが、復旧を支える団体の活動を一部ご紹介します。

陸上自衛隊

災害発生当時より人命救助、物資支援、ごみ収集や入浴支援など、自衛隊独自の装備と関係自治体との連携で災害対応に尽力いただいています。

武雄ライオンズクラブ婦人会 食生活改善推進協議会 など

被災により避難を余儀なくされている方々に、少しでも温かいご飯で元気を出してほしいという思いで毎日炊き出しを行っていただきました。

おもやいボランティアセンター

武雄市民と民間ボランティア団体とで設立。被災地へのボランティアの募集、食事の運搬や被災者の生活再建の相談にも応じています。

日本カーシェアリング協会

被災により車を失った方へ無料で車両提供いただいています。職場への移動、買い物など被災者が日常生活を送る手助けとなっています。